

## 思い出すとどうしたこと 本田一弘

震災から四年。もう四年なのか。まだ四年なのか。人によって捉え方は違うだろう。いずれにしても四年という時間は間違いなく人の記憶を薄れさせる。いわゆる記憶の風化だ。

今朝（三月五日）のテレビのニュースで岩手、宮城、福島 of 東北三県の被災者約七〇〇人にとつたアンケートが紹介されていた。「震災が風化しているか」という問いに「そう思う」が四三%、「ややそう思う」が三六%の合わせて約八割、福島に限っていえば八六%の人が風化が進んでいると感じているようだ。

記憶の風化に抗うにはどうしたらよいか。どんなメディアがあるか。音楽でもいい、美術でもいい、映像でもいいが、われわれには短歌がある。短歌という強靱な詩型に言葉を流し込み、保存するのだ。その短歌によって保存された記憶は、短歌が万葉以来千年以上も在り続けて現在まで来たように、これから千年後も残るかもしれない。いや、残ってほしいと心から願っている。

では、どんな事柄を短歌にして保存したらいいのか。震災詠でいえば、報道された事柄を基にして高所大所から政府や一企業を難じる歌や暗喩的手法を駆使した巧みな歌もあってはいいと思うが、それよりもっと震災にかかわる生活に身近な事柄を歌に詠んで記憶に留めておきたい。

そんなことを思っていたら、「現代短歌」三月号で「飲食のう

た」という特集が組まれていて、とても興味深く読んだ。十五人の歌人が「7首＋コメント」を寄せていたが、その中で佐藤通雅の「3・11の食」七首が身に滲みだした。震災と関連ある歌やコメントを寄せたのは佐藤通雅ひとりだけだった。たまたまなのかもしれないが、歌壇でも震災の記憶の風化が進んでいるのだろう。佐藤の七首をすべて引こう。

- ・その夜は残りご飯と缶詰と水を飲み込み床にもぐりたり
- ・次の朝はカンパンを割り牛乳の残りで胃の腑を納得させた
- ・備蓄せるもの全てを並べみる三日はなんとか生きのびられる
- ・けふに炊ぐ水求めむと列つくる清く正しくたれもが無力
- ・「ペットフード入荷しました」の表示ありそのまへにならぶ犬でない人

炊き出しの大鍋据ゑて木を燃やす 仙台味噌をどつと放り込む  
 ・ひとは日々食べねば生きていけぬこと眩しいばかりにこれは真実

七首とも散文的要素が強く、けして技巧的にすぐれているとはいえないが、あのひー二〇一一年三月十一日（金曜日）の飲食の場面を思いだし、直截に切り取られ訴えかけてくる力強い歌だ。虚構の世界に遊び、比喩の巧拙を競った作品を一概に否定するつもりはないが、今の私は人間としての根源を歌った歌を読みたいし、自分でも詠みたいと思う。飲食は人間の根源的な行為である。飲食を歌うということは、人間を歌うということである。

生活者としての視点を忘れずに歌を作り、震災の記憶を後世に残したい。まだ四年。今からでも遅くはない。ゆつくりと時間をかけて思い出そうではないか。それぞれの「あのひー」を。